

シンポジウム「第14回大腸がん死亡ゼロを目指して」が2月16日、大阪市中央区の松下IMPホールであった。3人の専門医の基調講演に続き、近藤勝重・毎日新聞客員編集委員の進行によるパネルディスカッションが行われた。その後、コーラスグループ「ポニージャックス」のコンサートもあり、約550人の参加者が熱心に聴き入っていた。【大道寺峰子】

「住之江方式」功績を記念

このシンポは、医師会と自治体、地域の3者連携による大腸がんの集団検診「住之江方式」の功績を記念し、始

まった。現在の大腸がん検診の先駆けともいえる住之江方式は1988年、当時の大阪市住之江区医師会長、瀧崎寛さんの尽力でスタートし、シンポでは瀧崎さんに花束が贈られた。

早期発見のための内視鏡検査と最先端の内科治療

大阪医科大学第二内科 樋口和秀教授



大腸がんは症状が出る前に、便潜血検査を受けるのが重要です。検査は1回につき2日分の便を提出しますが、1日分でも陽性なら必ず2次検査を受ける必要があります。2次検査はバリウムによる注腸検査もありますが、最近では負担の少ない内視鏡検査が一般的です。

AIや超音波 日進月歩で

内視鏡検査で5mm以下のポリープがあった場合、その場で組織を取り除きます。5mm以上の場合は、がんかどうか診断したうえで、2センチくらいまでは内視鏡でも対応可能です。それ以上になると手術や抗がん剤治療となり負担が大きくなるため、内視鏡で対応できる段階で治療したい。

ひがし・かずひで 大阪市立大学医学部卒。同大学助教授などを経て、2007年から現職。18年から日本消化管学会理事長。

検診が命を守る

大腸がんで死ぬのはもったいない

東京大学医学部付属病院放射線科 中川恵一准教授



この差は大腸がん検診の受診率によりです。例えば米国での受診率は日本の倍です。大腸がんは早期発見だと治りやすい病気ですが、進行してしまうと全く異なります。私の義妹は48歳で大腸がんで亡くなりましたが、検診を受けておらず、気付いた時はステージ4でした。がんは症状が出てくると病気で、症状が出てからでは遅すぎるのです。

便潜血検査 欠かさずに

大腸がんは早期発見が基本ですが、現実では進行して見つかる人も少なくありません。また進行がなくても転移の有無で対応は異なります。大腸にとどまっている場合は、周囲のリンパ節とともに腸を取り切るのが基本ですが、ほかの臓器に転移している場合は、抗がん剤による化学療法で、がんを小さくした後、手術するのが一般的です。

大腸がんに対する外科治療の進化

大阪医科大学付属病院がん医療総合センター 奥田準二特務教授



大腸がんは早期発見が基本ですが、現実では進行して見つかる人も少なくありません。また進行がなくても転移の有無で対応は異なります。大腸にとどまっている場合は、周囲のリンパ節とともに腸を取り切るのが基本ですが、ほかの臓器に転移している場合は、抗がん剤による化学療法で、がんを小さくした後、手術するのが一般的です。

排尿障害率ゼロに挑む

最近では腹腔鏡手術が9割近くです。傷が小さくて済むので、痛みや癒着が少なく、社会復帰しやすいです。再発などの場合でも対応しやすい。また、約1.5センチにもなる大腸の中でどこにがんがあるかで、手術の難易度は異なります。

パネルディスカッション

近藤 大腸がんにおける放射線治療は。中川 がんを小さくするため、手術前に放射線を照射することが多いです。大腸がんに限りませんが、放射線、内科、外科がチームとして治療にあたること

腸内の細菌をうまくコントロールすることで可能になった肛門からの術式です。腸内フローラと体全体の関係は今後さらに研究が進められると思います。近藤 大腸がんと便秘や下痢の関係は。奥田 便秘と下痢を繰り返すのは進行した大腸がんの特徴でもあります。大切なのはその前段階での早期発見です。

大切なチーム医療／消化管は脳と密接／研究進む腸内フローラ

ますます重要になっています。近藤 大腸は「第二の脳」と聞きました。樋口 ストレスを感じると食欲不振など胃や腸に影響するように、脳と消化管が密接に関係していることの表現です。また「腸内フローラ」とよく耳にされるとありますが、腸内環境が認知症や動脈硬化などにも関係しているとされ、研究が進められています。奥田 先ほど説明したNOSE手術は、

例えば、便秘はももとの体質なのか、最近変わってきたのかにもよります。最近変わったのなら検査を受けてもいいでしょう。50~60代に多い大腸がんですが、最近では30~40代の女性でも増えていますので、注意してください。近藤 おすすめの食べ物などは。中川 がんの原因は遺伝子の偶発的損傷です。つまり私が膀胱がんになったのは運が悪かったから(笑)。生活習慣も大事ですが、基本的のがんを予防する

進行 近藤勝重 毎日新聞客員編集委員



1945年生まれ。最新刊に「近藤勝重流」の抜け道(幻冬舎)。

食べ物はありません。あと、タバコは吸わず、お酒はほどほどに。そして、食べ物を気にするより、とにかく検診です。樋口 どの病気にもいえますが、さまざまなものを満遍なく、きちんと食べ、適度に運動するのが一番です。何かに極端に偏らない方がいいし、食べ過ぎもよくありません。野菜もいろいろな色の野菜をとるよう心がけてください。そして、必ず検診を受け、ストレスなく楽しく生きることが元気に繋がると思います。